

# 京都府の地震活動

令和8年（2026年）4月

第 39 卷 4 号

## 京都地方気象台

### 目 次

震央分布図、概況	・・・ 1
震央分布図、断面図	・・・ 2
【地震一口メモ】震度観測について	・・・ 3

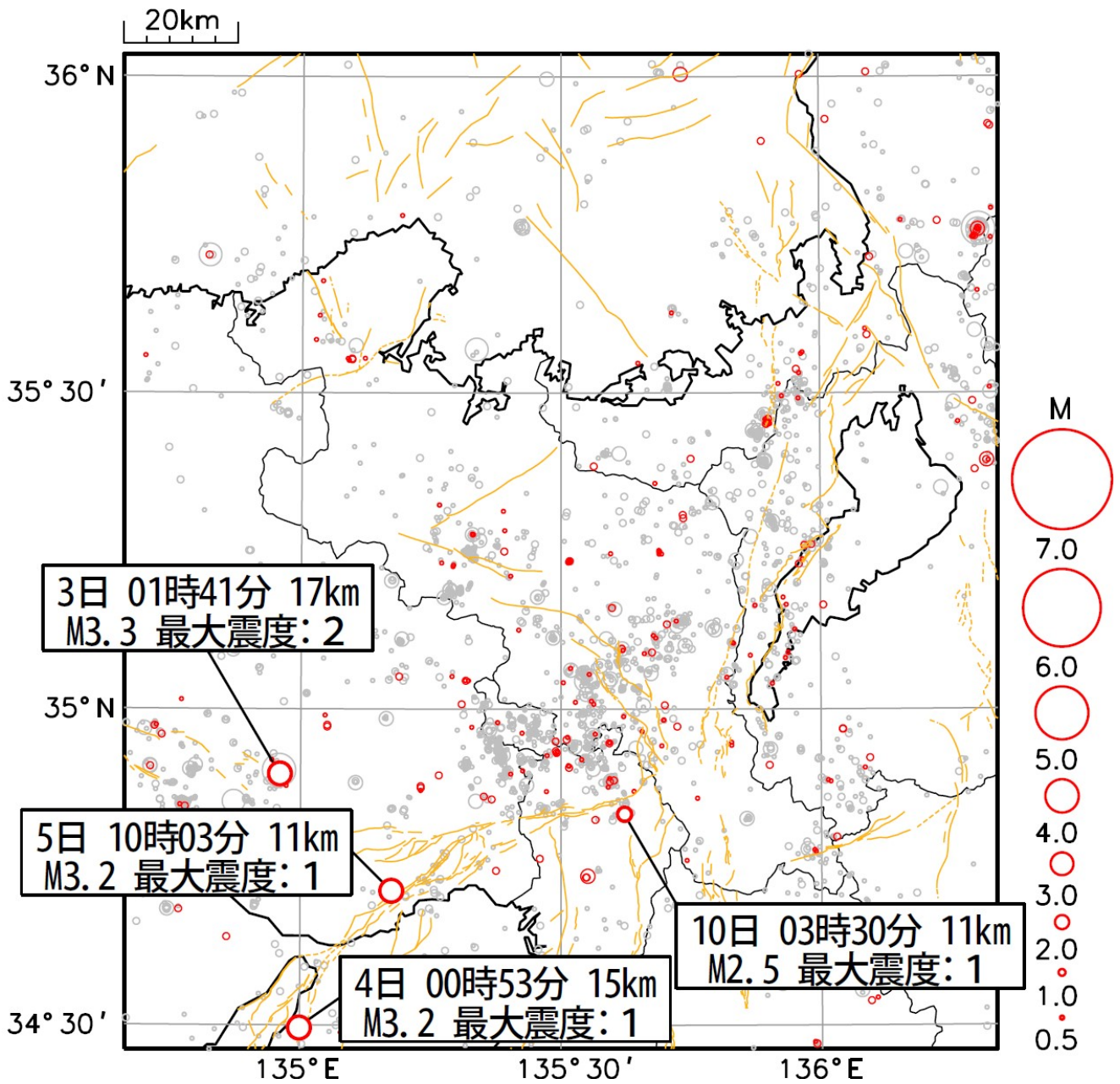
『京都府の地震活動』は、京都府及びその周辺の地震活動状況を解説するとともに、地震防災知識の普及に資するため、毎月刊行しています。

本誌に掲載した震源要素、震度データは、再調査された後、修正されることがあります。

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを使用しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、2022年能登半島における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（よしが浦温泉、飯田小学校）、2025年トカラ列島近海における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（平島、小宝島）、EarthScope Consortiumの観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

震度データは、気象庁の震度計の観測データに併せて地方公共団体及び国立研究開発法人防災科学技術研究所から提供されたものを掲載しています。

震央分布図（マグニチュード0.5以上、深さ0～80km）



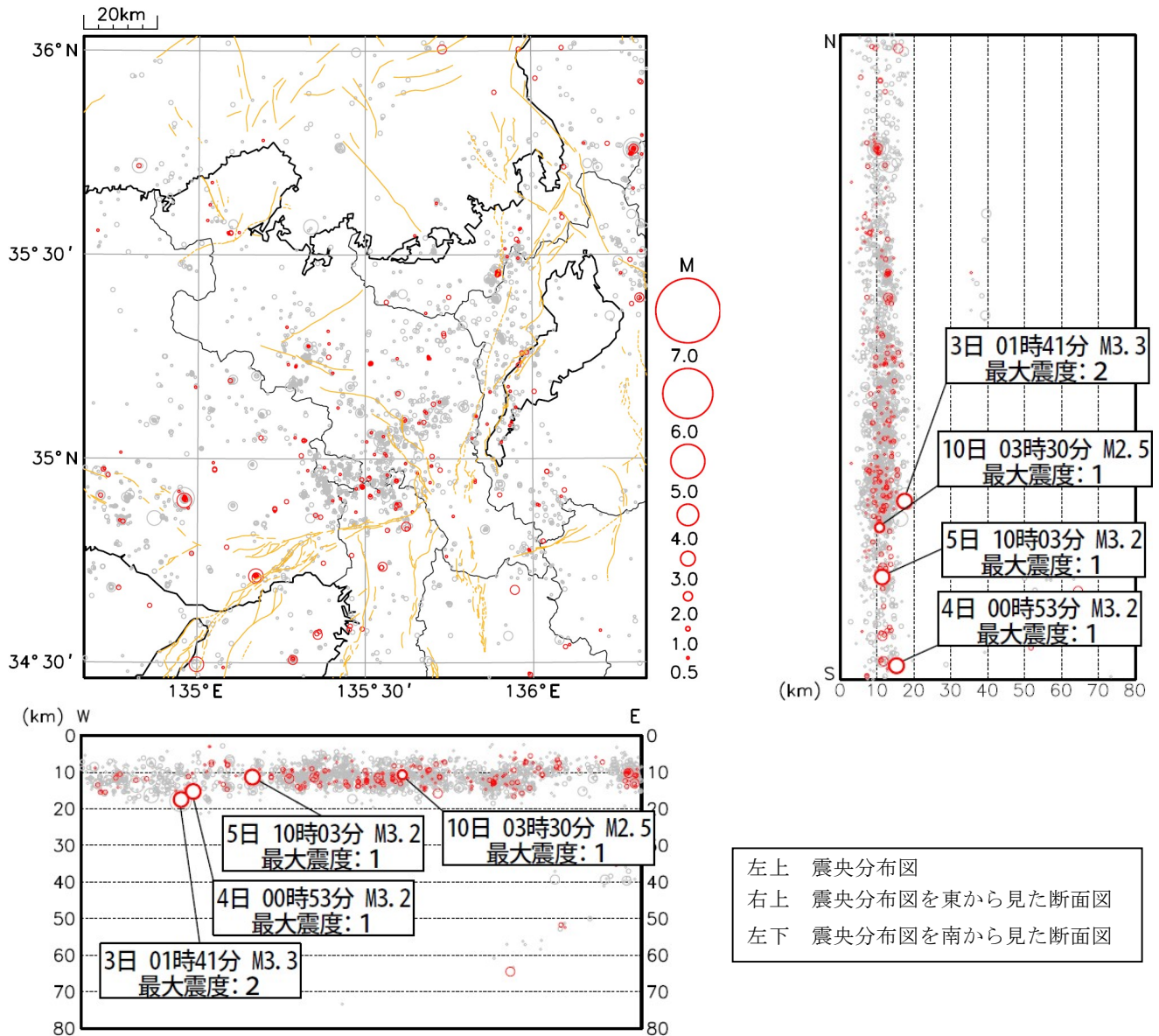
- ・ (2025年5月1日～2026年4月30日、深さ0～80km、M $\geq$ 0.5)
- ・ 2026年4月の地震を赤く表示（総数244）
- ・ 震源を表す「○」の記号は、マグニチュード（M）の大きさに対応したサイズで表記。
- ・ 震度1以上を観測した地震には、日時、深さ、マグニチュード（M）、最大震度及び京都府内で震度を観測した地震については京都府内最大震度を付記。
- ・ 橙色の線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

概況

4月中、震央分布図内で観測したマグニチュード2.0以上の地震は12回、震度1以上の揺れを観測した地震は4回でした（3月はそれぞれ12回、2回）。

京都府内で震度1以上を観測した地震は0回でした（3月は1回）。

## 震央分布図、断面図（マグニチュード0.5以上、深さ0～80km）



左上 震央分布図  
 右上 震央分布図を東から見た断面図  
 左下 震央分布図を南から見た断面図

- ・ (2025年5月1日～2026年4月30日、深さ0～80km、 $M \geq 0.5$ )
- ・ 2026年4月の地震を赤く表示（総数244）
- ・ 震源を表す「○」の記号は、マグニチュード（M）の大きさに対応したサイズで表記。
- ・ 震度1以上を観測した地震には、日時、マグニチュード（M）、最大震度を付記。
- ・ 橙色の線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

深さ数 km～約 20km に分布している地震は陸側のプレート内で発生した地震（地殻内地震）、深さ約 30km～約 60km に分布している地震は、沈み込むフィリピン海プレート内の地震です。

【地震一口メモ】

震度観測について

気象庁が発表する地震情報は、テレビやラジオ、インターネット等で配信され、国や地方公共団体、国民の皆様にも広く知られることとなります。その情報の一つである震度情報は、国や防災関係機関の初動対応等に利用されるだけでなく、被害の推定などの参考となる重要な情報です。

震度は、過去には人間による体感で観測していましたが、平成8年（1996年）4月からは、計測震度計（以下、「震度計」という。）という機械により自動観測を実施しています。なお、京都府内には、地震情報に活用している気象庁、地方公共団体、防災科学技術研究所の震度計が68箇所（令和8年3月時点）あり、震度計の配置図は、気象庁ホームページで公開しています。

気象庁が発表する震度は、気象庁震度階級関連解説表（以下、「関連解説表」という。）の通り震度0～7までの10階級（震度5、6は弱、強と2階級）あり、それぞれ階級によって揺れの状況や被害の程度が変わります。ここで、「震度と揺れの状況」の下にある注釈（青枠）をご覧くださいと、以下のように記載されています。

「この表は、ある震度が観測された時にその周辺で発生するゆれなどの現象や被害の目安を示したものです。」

震度計は、基本的に市区町村に一つは設置されていますが、お住まいの住居などは、必ずしも震度計の近くにはなく、地盤の状況や地震波の伝わり方などにより、震度の値に1階級程度の違いがあることもあります。これらを知っていただいた上で、事前の備えや地震発生後の防災活動、被害の確認等にご利用ください。これら震度を扱う際の注意点は、気象庁ホームページの関連解説表に「使用にあたっての留意事項」として記載されていますので、ご確認ください。

気象庁ホームページ「震度について」

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/shindo/index.html>



気象庁ホームページ「震度観測点」

<https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/intens-st/index.html>



気象庁ホームページ「気象庁震度階級関連解説表」

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/shindo/kaisetsu.html>



「震度と揺れの状況」（気象庁ホームページ）

**震度と揺れの状況**

<b>0</b>	<p><b>【震度0】</b> 人は揺れを感じない。</p>	<b>1</b>	<p><b>【震度1】</b> 室内で静かにしている人の中には、揺れをわずかに感じる人がいる。</p>
<b>2</b>	<p><b>【震度2】</b> 室内で静かにしている人の大半が、揺れを感じる。</p>	<b>3</b>	<p><b>【震度3】</b> 室内にいる人のほとんどが、揺れを感じる。</p>
<b>4</b>	<p><b>【震度4】</b> ●ほとんどの人が驚く。 ●電灯などのつり下げ物は大きく揺れる。 ●座りの悪い置物が、倒れることがある。</p>	<b>5弱</b>	<p><b>【震度5弱】</b> ●大半の人が、恐怖を覚え、物につままりたいと感じる。 ●棚にある食器類や本が落ちることがある。 ●固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがある。</p>
<b>5強</b>	<p><b>【震度5強】</b> ●物につかまらなさと歩くことが難しい。 ●棚にある食器類や本が落ちることがある。 ●固定していない家具が倒れることがある。 ●補強されていないブロック塀が崩れることがある。</p>	<b>6弱</b>	<p><b>【震度6弱】</b> ●立っていることが困難になる。 ●固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。ドアが開かなくなることがある。 ●壁のタイルや窓ガラスが破損、落下することがある。 ●耐震性の低い木造建物は、瓦が落下したり、建物が傾いたりすることがある。倒れるものもある。</p>
<b>6強</b>	<p><b>【震度6強】</b> ●はわないと動くことができない飛ばされることもある。 ●固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。 ●耐震性の低い木造建物は、傾くものや、倒れるものが多くなる。 ●大きな地割れが生じたり、大規模な地すべりや山体の崩壊が発生することがある。</p>	<b>7</b>	<p><b>【震度7】</b> ●耐震性の低い木造建物は、傾くものや、倒れるものがさらに多くなる。 ●耐震性の高い木造建物でも、まれに傾くことがある。 ●耐震性の低い鉄筋コンクリート造の建物では、倒れるものが多くなる。</p>

この表は、ある震度が観測された時に、その周辺で発生するゆれなどの現象や被害の目安を示したものです。  
詳しい解説は以下の気象庁ホームページに掲載しています。  
気象庁震度階級関連解説表 <https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/shindo/kaisetsu.html>